

まなキキオンライン講読会第3弾
ミシェル・フーコー著『社会は防衛しなければならない』

日時：2021年7月6日（火）18:00~19:30

範囲：一九七六年二月十八日の講義「戦争の諸制度」他

報告者：Nom

□民族と諸民族（P143 L1~）

一国家が国家のことを語るのではなくて、何か別のものがおのれについて語るのです。歴史のなかで語り、自分自身を歴史記述の目的とするこの何か別のもの、この新しい全体こそが民族（ナシオン）なのです。（P144 L2）

※百科全書にある定義（P144 L8）：

- ①人間の巨大な集合体、②ある限定された国に住む人間の集合体
- ③その国は境界線によって囲まれたものでなければならない
- ④国境の内部に置かれた、この人間の集合体は、それ固有の法律と政府に従わなければならない。

フーコーは「排除する狙いを持った挑発的な定義」（P144 L14）と批判。

一どのようにして、そしてなぜ、歴史言説の巨大な国家的組織化のなかに、新しい歴史の主体・対象としての民族という破壊原理を、貴族が導入することになったのか（P144 L 20）

16世紀末~17世紀初頭のイギリス議会及び民衆（P145 L5）：

君主制と貴族階級（絶対主義的）にサクソンの法（=自由な集合）を強調する

⇕

17世紀末~18世紀初頭のフランス貴族（P145 L15）：

「二方面で戦わなければならなかった」（P145 L16）

- 君主制に対して、自由を強調
- 第三身分に対して、侵略に由来する無制限の諸権利を強調

□ローマの征服（P147 L2~）

第一段階（P147 L2）：

一ガリアに入ってきたローマ人が最初に行ったのはもちろん、彼らに実質的に対抗しうる唯一の軍事勢力であった戦士貴族階級を武装解除することだったでしょう。（P147 L2）

一身分の劣った者たちに、もう少し彼らに平等を与えることで全員がずっと多くの平等を手にすることになる、と信じ込ませるのです。実際、この「平等化」のおかげで、専制政治は実現されるのです。（P147 L6）

⇒新たな貴族の出現 (P147 L11) :

—ローマ人は、彼らが必要としていた貴族階級を自分たちで構成していく (P147 L11)

—行政的な貴族であり、ローマ人がローマ的ガリアを組織していくのを、とりわけローマ人が、ありとあらゆる手段を講じて、ガリアの富を汲み尽くし、自分たちにとって有利な税制を確立していくのを手助けする役割を担う (P147 L13)

—第一に、ローマ法を巧みに、繊細に、鋭く使いこなすこと、そして第二に、ローマの言語を熟知していることです。この言語の知識と法の実践を核として、新しい貴族が出現するわけです。(P147 L16)

□ローマ人の栄枯盛衰 (P148)

—ガリアがいともたやすくフランク人の侵略を許したのは、国がこのように荒廃していたからであり、その原因はしたがって傭兵部隊の存在にあったのです。(P148 L16)

—問題は、敗北の内的原因はどのようなものであったのか、つまりローマ的統治 (中略) が論理的にみて不条理であり、政治的には矛盾を抱えているのはどうしてなのか、ということなのです (P149 L3)

□ブーランヴィリエによるゲルマン人の自由について (P149 L13~)

—無学で、野蛮で、比較的少数でもあったこの人々、そして実際にガリアに侵入し、それまでの歴史上の幾多の帝国のなかで最も素晴らしい帝国を破壊しえたこの人々の力の源とは何なのか? (P149 L15)

—ゲルマン人戦士たちが享受する自由とは、本質的には、エゴイズムの、貪欲さの、戦闘嗜好の、支配と略奪の自由だったのです。この戦士たちの自由は、寛容さの自由や全員平等の自由ではありません。支配によってのみ行使されうる自由なのです。つまり尊重を伴う自由であるどころか、残忍さの自由なのです。(P150 L18)

—どうして、ガリアに入ってきたフランク人戦士たちがガリア・ローマ人に同化することを、特にこの帝国法に服従することを、拒絶することができ、拒絶しなければならなかったのか、(中略)、彼らはあまりに自由過ぎた、つまり彼らはあまりに誇り高過ぎ、傲慢過ぎた……ので、戦争司令官が言葉のローマ的な意味で主権者になることを邪魔せずにはいられなかった。(P151 L9)

□ソワソンの壺 (P151 L18~)

戦利品の分配時に、

クローヴィス「これはぜひ私がいただこう！」

ある戦士「おまえにはこの壺に対する権利はない」

「戦争で得られたものは、勝利者たちそれぞれに分割されなければならない」

□封建制の諸起源 (P152 L8~)

—フランク人たちが征服した土地で存続することができたのは、ガリア人たちに武器を与えなかっただけでなく、武器を没収し、そうやって国のなかに孤立した形で、他の者たちとは明らかに異なる戦士階級、完全にゲルマン的な戦士階級が維持されるようにまず配慮したから (P152 L14)

—ガリア人はもう武器を持たなくなりますが、その代わりに、実質的に土地の耕作を任せられる、(中略)、一方に戦う者たちが、他方に土地にとどまって耕作する者たちがいる。後者には、ゲルマン人が軍事的な役割を果たすのに足るだけの賦課が要求されるのみです。

(P152 L16)

—フランク人はガリア人の産業を、ガリア人はフランク人が保証してくれる安全を手に入れる (P153 L6)

—賦課を物納する農民人口によって支えられ維持されていた軍事的階級の至福感こそが、言ってみればこの封建制という法的・政治的単位に固有の風土(クリマ)なのです。(P153 L10)

□ソワソンの壺 (P154 L10~)

二番目のエピソード：

クローヴィス→邪魔をした戦士「ソワソンの壺を思い出せ」と、頭をたたき割る。

—彼の権力の絶対的性格を明示する形式を利用して、市民的問題でしかないはずの問題を解決している。絶対君主制はしたがって、軍事的な形の権力と規律が市民法を組織化しはじめる時に生まれるのです。(P154 L14)

□教会、法、国家の言語 (P154 L17~)

—結局、フランク人たちがやって来たとき、ガリア人のなかでもっとも苦悩にあえいでいたのはどのような階層だったのか？(中略)ゲルマン人とフランク人の戦士たちに土地を没収されてしまったガリア人貴族階級だったのです。(P154 L20)

—唯一の避難所、それが教会だったのです。(中略)貴族階級はまず教会という装置を発展させるだけでなく、教会を通じ、教会が普及させていた信仰体系を通じて、人民への影響力を拡大してきました。同様に、貴族階級は教会でラテン語についての知識を深めます。そして三番目に、教会で貴族階級は絶対主義的形態をとる法であったローマ法を研究したのでした。(P155 L4)

—ガリア人貴族階級、教会に逃げ込んだガリア人貴族が、新しい君主たちが絶対主義を構築しようとしていたまさにそのときに、君主たちの自然な同盟者になるのはごく自然な成り行きだったのです。そしてこのようにして、ラテン語、ローマ法、法の実務とともに教会は、絶対君主制の大きな同盟者となったのです。(P155 L11)

一どのようにして、君主と人民との同盟によって、教会とラテン語と法の実務を媒介にして、戦士貴族階級が権力からはじき出されたか（中略）、貴族が権力を失ったのは、彼が別の言語体系に所属していたからです。（P155 L16）

一貴族はゲルマン諸語を話しており、ラテン語を知りませんでした。その結果、ラテン語の勅令によって新しい法体系が配置されようとしていたとき、貴族は何が起きているのか理解すらできなかつたのです。（P155 L18）

一自己意識を取り戻すこと、知と記憶の源泉を明らかにすること。これは歴史のありとあらゆる欺瞞を告発することなのです。そして自己意識を回復することによって、知の横糸のなかにふたたび身を据えることによって、貴族はふたたびひとつの力となることが、みずから歴史の主体となることができるでしょう。（P156 L20）

=歴史におけるひとつの力となることの第一段階

□ブーランヴィリエにおける三つの戦争の一般化：歴史法則と自然法則（P157 L13~）

一戦争が法を覆いつくしているのです。自然法を非現実的で、抽象的で、虚構のようなものにしてしまうくらい完全に覆っているのです。（P157 L17）

一あらゆる方向に好きなだけ歴史を辿ってみなさい。いずれにしても自然法など見つかりはしない。いかなる社会においても自然法など存在しない。（P157 L20）

一至るところに不平等が、至るところに不平等を生み出す暴力が、至るところに戦争がある。（P158 L8）

一自由とはどのようなものなのか？自由とは奪うことができること、わがものとしてできること、利益を得られること、命令できること、従わすことができることです。自由の最初の基準とは、他人から自由を奪うことができるということである。（P158 L15）⇔平等

一歴史の法則によれば、自由とは、それが他人を犠牲にすることで保障される自由である場合しか、そして本質的な不平等を保障する社会が存在する場合しか、力強いものにもならないのである。（P159 L6）

一歴史の不平等法則はつねに自然の平等法則よりも強力である。（P159 L10）

第一の一般化：「戦争は単なる転覆や途絶どころか、歴史そのもの」（P159 L19）

□ブーランヴィリエにおける三つの戦争の一般化：戦争の諸制度（P159 L21~）

一力関係を定めるものとは、ある民族が戦いに勝ち、他のものが負けるようにするのは、何なのか？それは軍事的諸制度の性質と組織なのです。（P160 L2）

一社会全体に戦争の刻印を記すのは、もはや単純な二分法的メカニズムではなく、戦争の向こう側とこちら側で捉えられる戦争、戦争を行う様態としての、戦争を準備し組織化する様態としての戦争なのです。（P161 L4）

第二の一般化：「戦争は一国家における、武器の一般経済、武装者および非武装者の経済であり、そこから派生するありとあらゆる制度および経済を伴うもの」（P161 L11）

□ブルーランヴィリエにおける三つの戦争の一般化：諸力の計算 (P161 L14~)

—どのようにして強者が弱者になり、どのようにして弱者が強者になったのか (P161 L21)

例①フランク人の貴族階級：土地所有が力の源

→戦争のことしか念頭になく、教育や語学を疎かにし無力化。

例②ガリア人の貴族階級：土地から追い出される→教会へ逃げ込み、権力を持つ。

—力関係のメカニズムを記述しなければならないとしたら、この分析が必然的に行き着くことになるのは何なのでしょう？ (中略) 勝者／敗者という大雑把な二分法がもはや必ずしもあてはまらないということです。強者が弱者に、弱者が強者になった瞬間から、新しい対立、新しい亀裂、新しい分割が生じることになるでしょう。弱者たちはたがいに手を組み、強者はある者に対抗して別の者たちと手を組もうとするでしょう。(P163 L1)

第三の一般化：17世紀までは侵略、集合対別の集合と捉えられていたもの

→「依存や同盟や内的衝突の小さな体系」(P163 L10)、

「万人の万人に対する戦争が存在する」(// L17)

□戦争についてのコメント (P164 L3~)

—戦争こそが法の断絶自体を理解可能性の解読子に変え、戦争によって、法関係を恒常的に支えている力関係を決定することができるようになるでしょう。(P164 L8)

—歴史は、戦争の事実自体を起点に、そして戦争との関連で行う分析から出発して、戦争、宗教、政治、習俗、気質、といったあらゆるものを関連づけることができるでしょうし、社会の理解可能性の原理となるでしょう。(P164 L12)

—あらゆる歴史的言説において、社会を理解することを可能にしてくれるのは戦争なのです。(P164 L15)

—力関係というものは、君主以外の誰かが一つまり (中略) 民族のようなものが—その歴史の内部で見定め、決定することのできる歴史的対象となるのです。本質的に政治の対象であった力関係がいまや歴史の対象に、いやむしろ歴史的・政治的対象となります。(P165 L9)

—貴族が、第三身分と君主制に対して同時に政治的戦争をしかけたときに、この戦争の内部で、そして歴史を戦争として考えることによって、私たちが現在知っているような歴史言説のようなものが確立されえたのです。(P166 L5)

—あるひとつの階級が完全に衰退しつつあり、政治的および経済的権力を手放しつつある場合でも、ブルジョワ階級、次いでプロレタリアートが手中に収めることになるような歴史的合理性を配置した例もある (P166 L11)

—貴族階級は戦争をしていたからこそ、その戦争をまさしく対象にすることができたのであり、戦争は同時に言説の出発点、新しい歴史言説が出現する可能性の条件、この言説が向けられる参照体系、対象となった (P166 L14)

ークラウゼヴィッツが（中略）、戦争はほかの手段によって継続された政治であるということができたのは、十七世紀に、十七世紀から十八世紀の変わり目に、政治は他の手段によって継続された戦争であると分析し、言い、示すことができた者がいたからなのです。（P166 L18）

□報告者 Nom の所感

・ブーランヴィリエの多角的な分析、三つの一般化から、フーコーが主張してきた「戦争は継続された政治」という背景が見えてきたような気がしました。

・諸力の計算の部分で、フランク人もガリア人もそれぞれ自分たちを守ろうとしていた、それが戦争の発端となっていた。何かを守ろうとすることが闘うことであるということを改めて感じさせられました。

・最近、ワクチン不足が話題となっています。自治体、企業、オリンピックボランティア等、それぞれが必要とする理由を主張して、供給のコントロールが効かなくなっています。COVID-19 を鎮静化する存在として期待されていたワクチンが、今や奪い合いの火種になっており、私たちの身近にも戦争は一般化されているのだと考えさせられます。